松江藩主の居所と行動

——京極·松平期——

西島太郎

はじめに

江戸時代の松江藩についての研究は、昭和16年(1941)に刊行された『松江市誌』⁽¹⁾ 以降、どれだけ深化したのであろうか。『松江市誌』編纂時の史料の多くは確認できず、その上、藩主松平家の史料も散逸している。市町村史編纂での在地史料の発掘も多くないなか、先人の努力により、徐々に事実が明らかにされてきている。しかしながら、松江藩の研究を行うために必要な、基礎となる諸道具については、いまだ整備されていないのが現状である。本稿で取りあげる、藩主の居所と行動についても同様である。

江戸時代、松江藩主が参勤交代していたことは周知の事実である。しかし何年何月何日のある時点で、藩主が江戸にいたのか、松江にいたのか、とっさに調べようとしても容易に調べられるものがない。藩主がいつの時点でどこにいたのかによって、藩の行事や、藩士、出入りの商人たちの動きも違ってくるであろう。そのため、こういった基本事項は、周知の事実としておかなければならない。

この様な松江藩研究の実態を鑑みて、本稿では、最も基本作業となる、藩主の居所とその行動について明らかにする。

本稿を書くきっかけとなったのは、安部吉弘氏所蔵の「御代々様東西御発駕御着御日限帳」との出会いによる。本史料は、藩主がいつ江戸を出発し、いつ松江に到着したのか、松江をいつ発し、江戸へ到着したのかを、克明に記している。ところどころ記載のない部分があるものの、ほぼ江戸時代全ての時期の藩主の動きがわかる。

これまで、藩主の居所とその行動を調べようとすれば、各藩主の年譜を丁寧に読み込むなかから明らかにしなければならなかった。藩主の居所と行動を一覧にしたものはない。

本稿では、「御代々様東西御発駕御着御日限帳」を基本にして、年譜のある藩主については年譜により校訂し、松平期の藩主の居所と行動について、一目でわかる様にした。また、一代で潰えた京極忠高の居所と行動についても、拙著『京極忠高の出雲国・松江』(2) による成果を盛り込んで付すこととした。今後、松江藩研究の道具として活用され、多くの事実が明らかとなることを期待したい。

I.「御代々様東西御発駕御着御日限帳」について

(1)「御代々様東西御発駕御着御日限帳」1冊

松平期全ての参勤交代の状況を知ることのできる「御代々様東西御発駕御着御日限帳」の形態は、 縦13.3 cm、横19.3 cmの横帳で、32 丁の綴りである。表紙に「御代々様東西/御発駕 御着御日 限帳/上田」とある。内題は「御元祖様より 御代々様東西/御発駕御着御日限帳」と記されている。元祖の松平直政が、出雲国を幕府から拝領した寛永15年(1638)2月11日から、10代定安が文久3年(1863)4月4日に江戸から松江城へ到着した記事までを載せる。225年間の記録である。松平氏歴代を、各人が家督を継いだ時点から死去するまでの、松江一江戸間の発着年月日を記している。また道中川留となった時や、伊勢神宮など立ち寄った場所についても注記がある。

その内容の信憑性は、現存する各藩主の年譜と校合を行うと、ほとんど合致することから、概ね 正確なものと判断される。しかし誤写と思われる部分もあるので注意が必要である。

帳簿の最後は、9丁分白紙となっているところをみると、文久3年4月以降の近い時期に作成されたのではないかと思われる。裏表紙の見返しには、「上田徳吉」と墨書がある。上田氏は松江藩士である。しかし藩士の当主の事跡を記した「列士録」(3) には、徳吉の名はない。松江藩士上田一族の一人と推定するにとどめたい。

(2)「松平家参勤交替記」 1冊(4)

「御代々様東西御発駕御着御日限帳」が、初代直政から 10 代定安までの状況を記しているのに対し、「松平家参勤交替記」は、初代直政から 9 代斎貴の嘉永 5 年(1852)の江戸在府までの状況を記す。

本書は、『島根県史』編纂のため、大正15年9月22日に松江市寺町の高見朔一郎所蔵本を謄写したものである。外題は「松平家参勤交替記」となっている。しかし本文の書き出しは、「参勤交替記」とのみ記しており、こちらが元の題名であろう。1丁表に「御元祖様より/御当代様まで/御帰国/御参府御日限取調、可差出旨ニ御座候処、/於御役所、以前之儀、帳面等無御座、相分/不申候処、小□(堀か)弥太郎帳面所持ニ付写/取、別紙之通、」とある。「御元祖様」は初代直政、「御当代様」は記述の終わる嘉永5年正月14日時における藩主、9代斎貴である。斎貴は、翌嘉永6年9月5日に隠居するので、この冊子が写されたのは、嘉永5年正月14日から同6年9月5日までの1年7か月余りの間ということになる。

本冊子を写し取った人物は不明である。所蔵者の高見氏の先祖の可能性が高い。この冊子を写し取った人物は、藩主の帰国と江戸参府の日限を調べて差し出すよう命ぜられている。命じたのは誰かも判然としない。しかし作者は、藩の役所で調べようとしているから松江藩士であろうし、命令したのもその主人であろうと推察される。

この冊子が写された嘉永5年正月から翌年9月までの時期は、出雲へ帰国しない藩主斎貴に対し、家老塩見宅広が諌死、斎貴は急遽帰国した。翌年3月には、近習頭の三谷忠太郎らのクーデターが露顕し、9月、ついに斎貴が隠居に追い込まれた時期にあたる。これまでの藩主の参勤交代の状況を調べ、現藩主の状況と比べようとした可能性が考えられる。

また、藩の役所には、歴代藩主の参勤交代の状況がわかる帳面がなかったことも判明する。しかも、藩の役所でわからなかった藩主の参勤交代の状況を記した帳面が、「小□(堀か)弥太郎」なる人物が所持していたのである。

「御代々様東西御発駕御着御日限帳」は、「松平家参勤交替記」の本文と同じ形式で書かれており、文言も略して記した部分を除き同じである。そのため同一の祖本を基にしていると考えられる。両書で違うのは、前書には、後書の記載以降(定安期)の状況も記しており、また、後書には最初に書写理由を記した部分があることである。このことから、同内容の祖本に、「松平家参勤交替記」以降の状況を書き継いだものが、「御代々様東西御発駕御着御日限帳」であると考えられる。双方

ともに、誤字脱字があり、一長一短がある。しかし、平出や欠字のあり方から、「御代々様東西御 発駕御着御日限帳」の方が、祖本の状態をよく留めていると判断される。

Ⅱ。藩主の居所と行動がわかるその他の史料──校訂諸本について──

「御代々様東西御発駕御着御日限帳」を底本に、歴代藩主の居所と行動の一覧を作成した。しかしこの冊子には、もととなった史料からの、写し間違えと思われる箇所がいくつか見受けられる。そのため、藩主の居所と行動を記した年譜等の史料によって校訂を行い、諸本の異同を明確にした。本稿では、あえて異同のある日時について、どれが正確な日時なのか決めることはしなかった。今後の研究の深化により確定されることを期待したい。

校訂に用いた史料は次の通りである。

(1)「出雲侯御参勤御帰国記」1冊 (5)

本書の奥書によれば、松江市茶町の桑原羊次郎氏所蔵の折本を、昭和24年6月1日に筆写したものである。万年筆で写しとられている。奥書の注記は、「原本は楮紙の□厚手を以て作れる、巾弐寸四分五厘、縦五寸七分弱の折手本に参行宛二段に認めあり、小□□弐枚、表紙には 御参勤 記 とあり、但し第何代より治世何年に至るまでの文字は筆写の際附加せしものにて、勿論原本には記載なきものである」と記している。内容は、6代宗衎の延享2年(1745)から、10代定安の文久4年(1864)正月22日の京都到着までの、江戸一松江間の発着年月日を記す。

(2)「高真院様御年譜」1冊 (6)

本書は松平初代直政の年譜である。奥付に「小川」とある。『出雲叢書』14 収載の「高真院様御年譜」(「) は、この旧小川氏所蔵本を底本としたものと思われ、一二点のつけ方や文面が全く同一である。また次に述べる「雲国侯年譜」の松平直政の項とも同じである。しかし「雲国侯年譜」に比べ小川氏旧蔵「高真院様御年譜」は、一二点や文章をきちんと書いており、良質の写本と判断される。

(3) 「雲国侯年譜」4 冊⁽⁸⁾

本書は、内題の下に「臣謹按黒澤三右衛門安部忠弘著」とあり、松江藩儒の家、黒澤忠弘の編纂であることがわかる。編纂時期は、初代松平直政から7代治郷期の文化8年(1811)までを記していることから、19世紀前期に編纂されたものと考えられる。島根県立図書館本は中嶋氏旧蔵本である。各冊子の内容は、次のようである。

第一冊 初代直政— 3代綱近 慶長 6~宝永 6年(1601—1709) 第二冊 4代吉透— 5代宣維 寛文 8~享保16年(1668—1731) 第三冊 6代宗衍 享保14~天明 2年(1729—82) 第四冊 7代治郷 宝暦 1~文化 8年(1751—1811)

(4)「天隆公年譜」5冊 (9)

松江藩の儒官であり、藩校文明館の初代教授桃白鹿が編纂した、6代藩主松平宗衍の年譜である⁽¹⁰⁾。松江藩士の経歴を記した「列士録」によれば、彼は寛政2年(1790)正月13日に幕府へ提出する藩主「御系譜」の「御用懸」になり、享和元年(1801)8月に没しているから、この間に成立したものと考えられる。

(5) 『松平不昧伝』所載「松平不昧年譜」(11)

本書は、松平家が所持していた諸史料を利用して、松平家編輯部によって編集され、大正6年 (1917) 4月に箒文社から刊行されたものである。

(6) 『贈従三位松平定安公伝』1冊

昭和9年(1934) に定安の子、松平直亮が父の伝記を足立吉氏(栗園)に依嘱して編纂し、同年4月に私家版として刊行された。「御代々様東西御発駕御着御日限帳」の記載がなくなる、元治元年(1864)以降の居所と行動は、すべて本書によった。

以上、校訂で用いた史料を、歴代に当てはめると次のように整理される(12)。

初代直政——「高真院様御年譜」「雲国侯年譜」「松平家参勤交替記」

2代綱隆、3代綱近、4代吉透、5代宣維——「雲国侯年譜」「松平家参勤交替記」

6代宗行——「天隆公年譜」「雲国侯年譜」「出雲侯御参勤御帰国記」「松平家参勤交替記」

7代治郷——「雲国侯年譜」「出雲侯御参勤御帰国記」「松平不昧年譜」「松平家参勤交替記」

8代斎恒——「出雲侯御参勤御帰国記」「雲国侯年譜」(部分)「松平家参勤交替記」

9代斎貴——「出雲侯御参勤御帰国記」「松平家参勤交替記」

10 代定安——「出雲侯御参勤御帰国記」『贈従三位松平定安公伝』

Ⅲ. 歴代藩主の居所と行動の特徴

歴代藩主の居所と行動を一覧(後掲の「松江藩主の居所と行動」)にしてみると、各藩主の行動の特徴をうかがうことができる。まず当然のことながら、参勤交代を隔年で行っているという点である。しかし、諸々の事情により隔年参勤を果たせない場合があり、そのことが居所から見える藩主の特徴になる。

参勤交代の道筋は、藤沢秀晴氏が明らかにされているように、松江から山陽へと向い、そのあと東海道を通る場合と、中山道を通る場合の2つがあった(13)。日数も、天保13年(1842)に中山道を通った例から25日かかったとし、東海道を通った場合、23日だったと推定されている。

しかし、「松江藩主の居所と行動」一覧(後掲)によれば、5 代松平宣維までは速いもので 17 日、多くが 20 日前後である。6 代宗衍は 25 日~ 1 か月近くかけることが多く、途中、近江唐崎や石山寺、宇治など遊覧することも多かった。7 代治郷は、20~ 25 日間かけ、それ以降の藩主も 25 日前後という場合が多かった。いずれも、東海道・中山道のどちらを通ったのかはっきりしない場合がほとんどである。最も早く江戸(東京)一松江間を行き来したのは、明治 2 年に定安が、維新政権から松江藩知事に任ぜられるために、英国汽船にのって東京(江戸)へ赴いた時で、わずか 6 日で松江から江戸へ行った。

参勤交代の日数について、藤沢氏が検討した事例は、江戸後期の場合であった。江戸前期では、 20日前後という速さで江戸-松江間を行き来していたのである。

次に、東海道と中山道のどちらを通るのが通常の道程であったのか。藤沢氏ははっきり述べていない。「松江藩主の居所と行動」一覧からは、日光社参して上下する場合、必ず中山道を通ったことがわかる。宝暦7年(1757)5月に宗衎が江戸から松江へ帰国する際、一旦、東海道をめざしたものの、大雨によって道橋大損であるとの理由で、急遽、中山道に進路を変更している (14)。何らかの理由があるときに、中山道を通っていることが窺える。さらに、藤沢氏が指摘されるように、江戸一松江間の日数は、中山道より東海道のほうが2日短い。旅程が1日でも多いと、それだけ経費はかさむ。そのため、旅程の長い中山道は、東海道に比べ効率的でない道順であった。これらの

ことから、東海道が通常の道程だったのではないだろうか。日光社参を兼ねるか、東海道が橋梁などの破損で通りにくい場合など、理由のある時に中山道が選ばれたものと考えられる。

また興味深い点として、初代松平直政は、参勤交代の道中で生涯3度も伊勢神宮へ社参しており、 彼の信仰のあり方を考えるうえでも注意すべきである。

次に、各藩主の出雲帰国回数をみると次のようになる。

各藩主の出雲帰国回数

京極忠高 2度 松平初代直政 13度 2代綱隆 12度 3代綱近 15度 4代吉透 0度 5代宣維 8度 6代宗衍 6度 7代治郷 21度

8代斎恒 7度 9代斎貴 11度 10代定安 11度

藩主であった期間にもよるが、7代治郷が最も回数が多く、藩主としては1度も松江の地を踏まなかった者(4代吉透)もいた。様々な理由がある。以下、各藩主の居所と行動から読み取れる特徴について解説を行う。

京極忠高

寛永12年(1635)6月に武家諸法度が幕府から発せられ、全国の大名たちはこれ以降、毎年4月に隔年で参勤交代するよう定められた。すでに元和3・4年(1617・18)頃から諸大名の隔年参勤が行われていた。この寛永12年の武家諸法度により、西国大名と東国大名とが4月に入れ替わる、隔年交替となった。

京極忠高の治世は、ちょうど寛永 12 年の武家諸法度が発せられた時期にあたる。そのため寛永 11 年冬に江戸へ来た忠高は、翌 12 年を江戸で滞在したものと考えられる。彼が再び松江へ帰国するのは、寛永 13 年の 4 月のことだった $^{(15)}$ 。

松平初代直政・2代松平綱隆

京極氏のあと、出雲国を引き継いだ松平氏は、幕府の法令を守り、隔年参勤を行っている。しか し、その状況にはいくつかの特徴が認められる。

松平初代の直政は、出雲国拝領以後、慶安 $2\sim4$ 年(1649-51)の 3 年間を除き、亡くなるまで参勤交代を隔年で行っている。慶安 $2\sim4$ 年は、江戸城西丸の修築の監督を命ぜられていた (16)。そのため、在府したものと考えられる。

直政期の特徴として、嫡子綱隆が父と交替で松江へ帰国することである。3代綱近以降は、7代 治郷が家督継承前に1度、帰国したのみであるのに対し、直政・綱隆父子が交互に松江一江戸間を 往復している事実は興味深い。綱隆は、生まれてから22歳まで武蔵国(江戸)にいたが、23歳の 承応2年(1653)から隔年で松江一江戸間を往復し、家督を継承するまで7度、松江の地を踏んで いる。

また、父子が交互に出雲へ帰国したのであるが、かならず江戸で数日から1・2か月の間、父子が共に暮らしている。父直政は、嫡子綱隆が江戸へ下ってくるのを見届けて、松江へ帰国したのである。では、なぜ直政・綱隆父子は、交替で帰国したのだろうか。直截理由を示すものはない。しかし、一つには、嫡子の始めての出雲帰国が、直政53歳の時で、自らの年齢を鑑みて、自分のいない間の出雲支配を嫡子に任せ、直政亡き後の代替わりを円滑に行うことが目的だったのではないだろうか。

3代松平綱近

3代綱近は、17歳で家督を継ぐまで、武蔵国(江戸)にいた。家督を継いでから宝永元年(1704)

に隠居するまで、欠かさず隔年で参勤交代を行い、15 度出雲国へ帰国している。また他の藩主が 隠居後は江戸で暮らすのが多いのに対し、彼は、隠居後、亡くなるまでの5年間を松江城北の丸(今 の護国神社のある場所)で暮らした。

彼の松江への思い入れは、自らが隠居後、松江で暮らすという点にうかがえるだけでない。松江における松平家の菩提寺、月照寺の大修理を行ったことにも現れている。延宝3年(1675)に彼が藩主になると、まず先代綱隆の廟所の設営にかかり、翌年、宝山院(綱隆)廟門を建造した。続いて初代直政(高真院)の廟門建造に取り掛かり、3年後に完成させた。また高真院廟門建造の4年後に、同寺の大修理を行った(17)。

綱近は、松江における菩提寺整備を積極的に行い、自らも隠居後、松江に居住したことに見られるように、出雲国に深い思い入れのあった人物だったのである。

4代松平吉透

綱近と対照的なのが、4代吉透であった。2代綱隆を父にもつ吉透は、宝永元年2月に綱近の養子となると、その3か月後に家督を継いだ。家督を継いだ翌年9月に亡くなるので、藩主としては1度も帰国しなかった。しかし、彼は松江生まれで、18歳まで松江で育ち、貞享2年(1685)9月に江戸へ行った人物であるから、藩主として松江の地を踏むことはなかったからといって、松江を知らなかったとはいえない。兄綱近の出雲国での取り組みを、松江でつぶさに見て育ち、これから藩主して活躍しようとした矢先の死去だったのである。

5代松平宣維

4代吉透が急死したこともあり、彼の嫡子宣維(荘五郎)は、8歳で家督を継がなければならなかった。そのため、江戸生まれの宣維は、家督継承から9年の間、出雲国松江へ向かうことはなかった。そして正徳4年(1714)に17歳にして、はじめて出雲へ帰国した。以後、京都への幕府の使いを命ぜられた享保元年(1716)と同14年を除き、隔年で参勤交代を果たしている。藩主として8度帰国し、江戸で亡くなった。

6代松平宗衍

5代宣維が、34歳で亡くなったことにより、家督はまたしても幼少の嫡子(幸千代、宗衎)が継がなければならない事態が訪れた。享保3年(1731)8月に家督を継承したとき、宗衎(幸千代)はわずか3歳であった。そのため母里藩の松平直員が、松江藩松平家の名代を勤めた(18)。江戸で生まれ、江戸で育った宗衎は、家督を継承してから14年の間、江戸にいた。延享2年(1745)4月に、17歳にして初めて出雲国松江へと向かった。しかしその後、4度、隔年参勤で出雲へ帰国するものの、4度目の帰国(宝暦元年)も、わずか4か月半で江戸へ向かう。しばらく病気を理由に江戸在府が続き、同7年に6年ぶりで出雲へ帰国したときも、養生を理由に4か月で江戸へ向かった。2年の後、帰国し、翌年参勤のために江戸へ向からと、その後は病気を理由に江戸に居続け、再び出雲へ帰国することはなかった。明和4年(1767)の隠居後も、亡くなるまで江戸で暮らした。そのため、宗行は藩主としての期間が長いにもかかわらず、わずか6度しか出雲の地を踏んでいない。

7代松平治郷

6代宗衍があまり出雲へ帰国しなかったのに対し、子の7代治郷は、家督を継ぐと隠居するまで、 律儀に隔年参勤を繰り返した。文化3年(1806)に隠居して、江戸大崎の別邸へ移った後も、2度、 出雲の玉造温泉へ入湯のため帰国している。治郷は生涯21度、出雲へ帰国しており、歴代藩主の なかで最も多く帰国した殿様であった。そのため、治郷は父宗衍と違い、領国のことを熟知して藩 政改革(御立派の改革)に臨み、殖産興業に勤めたことがわかる。

8代松平斎恒・9代松平斎貴

8代斎恒は16歳で家督を継ぐと、隔年参勤を繰り返した。彼が文政5年(1822)に32歳で江戸において亡くなると、わずか8歳の子斎貴(鶴太郎。斉斎)が家督を継いだ。文政10年(1827)9月に13歳で初めて出雲へ帰国した。そして弘化2年(1845)まで、9度の隔年参勤を繰り返した。以後、将軍の名代としての上洛などがあり、4年の間、江戸在府し、嘉永2年(1849)に出雲へ帰国するも、わずか3か月で江戸へ下った。

斎貴は天保頃から「大酒、酔狂、淫蕩」がはなはだしくなり、出雲国へも帰国しなかった。そのため家老などが諫言したにもかかわらず、効果はなかった。ついに嘉永 4 年 11 月 2 日、家老の塩見宅広が諫死した (19)。塩見の諫死により、斎貴は急遽松江へ向かう。12 月 14 日に江戸を発ち、1 か月後の翌 5 年 1 月 14 日に松江に着いた。正月を道中で迎えての帰国であった。

翌年3月、近習頭の三谷忠太郎や用人の安藤謙之丞らにより、斎貴を廃して広瀬藩主を松江藩主に迎えようとするクーデターが露顕した。藩内の統制が図れない状況から、親戚である越前福井藩の松平春嶽、美作津山藩の松平斎民、肥前佐賀藩の鍋島直正らの計らいで、斎貴は隠居に追い込まれた。彼は4月に隠居願いを幕府へ提出し、9月5日に隠居が許された。隠居後は、松江城内に観山御殿を建て、安政5年(1858)までの5年間、住んだという(20)。同5年に江戸へ行き、5年後、江戸で亡くなった。

10 代松平定安

斎貴の跡を継いだ10代定安は、文久3年(1863)までの10年間、順調に隔年参勤を果たした。しかしこれ以降の維新前後は、京都との往復で、江戸(東京)には行かなくなる。幕末から維新前後の定安は、松江を基点に行動している。文久3年以降で江戸(東京)に行ったのは、維新政権により松江藩知事に任ぜられるために赴いた明治2年(1869)であった。明治4年7月14日に廃藩置県となると、9月7日に松江を発し、東京へと向い、以後亡くなるまで東京で過ごした。

おわりに

本稿では、江戸時代における松江藩主の居所と行動を、一覧にして明らかにし、そこから読み取れる特徴について考察を行った。京極・松平期に限定されるものの、参勤交代が制度化されてからのものであるから、隔年参勤するのを通常とする。しかし、隔年参勤していない場合がいくつかあり、そこに藩主の行動の特徴を読み取ることができた。

参勤交代は、江戸時代の前期は20日前後で江戸一松江間を行き来することが多く、後期になると25日前後から1か月近くかけるように変化した。その道程は、東海道を通るものが主であったものと推定された。中山道を通るのは、日光社参を兼ねる場合か、東海道を通るのに支障がある場合であった。道中、社寺参詣を行うこともあり、松平初代直政は伊勢神宮へ、宗衍も多賀大社や石山寺など参詣した。松江の地で亡くなったのは2代綱隆と3代綱近であり、とくに綱近は、松江の菩提寺月照寺の大規模な修繕など、墓所の整備を積極的に行っており、出雲国松江に対する思い入れの程を知ることができた。逆に、6代宗衍や9代斎貴は、江戸での生活を好み、出雲への帰国は多くなかった。

藩主の居所と行動からは、この他にも様々に読み込むことが可能である。松江藩政や家臣の動き、

江戸や領国出雲での様々な出来事について、藩主がどこにいたのかを念頭に、史料を読み解いてゆくと、これまでと違った側面が見えてくるであろう。また本稿では、なぜ宗衍以降、それまでよりも日数をかけて江戸一松江間を往復するようになっていくのかについて、解答を与えることができなかった。別の角度からの分析が必要である。本稿で言及することができなかった、松江藩の参勤交代の人数や、諸本による藩主の行動した日時の違いを正していくこと等とともに、今後の課題としたい。

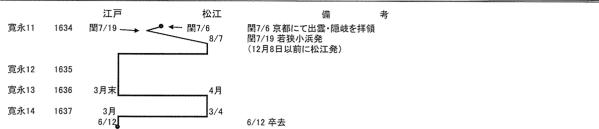
注

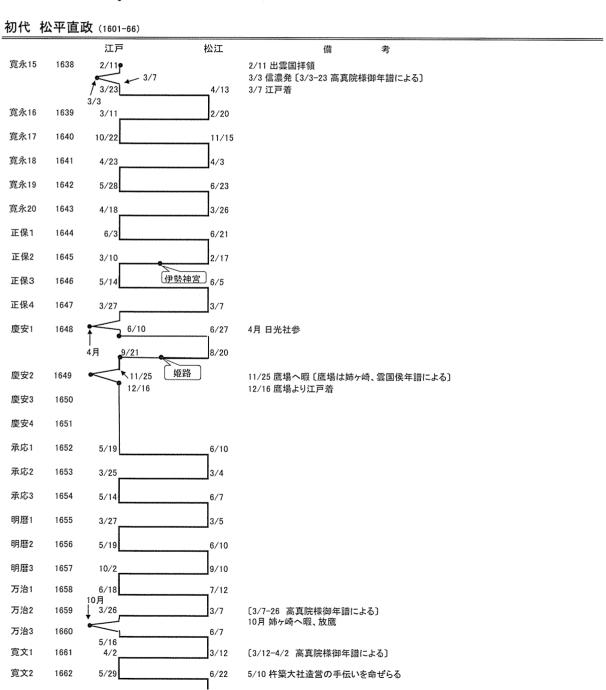
- (1) 上野富太郎・野津静一郎編、松江市庁刊。1973年、名著出版より再刊。
- (2) 松江市教育委員会、2010年。
- (3) 島根県立図書館所蔵。
- (4) 島根県立図書館所蔵『旧島根県史編纂史料 近世筆写編 152』。
- (5) 島根県立図書館所蔵。架蔵番号 092/44。
- (6) 島根県立図書館所蔵。架蔵番号 092. 8/97。
- (7) 島根県立図書館所蔵。架蔵番号 C1/2088/14。
- (8) 島根県立図書館所蔵。架蔵番号 092.8/1243。
- (9) 島根県立図書館所蔵『旧島根県史編纂史料 近世筆写編 187』。旧広瀬藩主松平直平蔵本を、大正 2 年 8 月に 腾写したものである。
- (10) 各冊の内題左下に「教授兼侍講臣桃源蔵(白鹿)奉命修撰」とある。
- (11) 『増補復刻松平不味伝』原書房、1999年。
- (12) なお、昭和46年10月16日から11月3日にかけて、島根県立博物館で開催された「月照寺展」で作成された「月照寺展目録」には、「藩祖年譜七冊」(初代)、「綱近同(年譜)一冊」(3代)、「吉透同一冊」(4代)、「宣維同三冊」(5代)、「宗衍同七冊」(6代)、「斉恒同三冊」(8代)、「斉斎(斉貴)同四冊」(9代)が記載されている。いずれも参照すべき年譜(とくに斉恒・斉貴)であるものの未見である。
- (13) 藤沢秀晴「山陰諸藩主の参勤交代」『島根県地方史研究』20、1964年。
- (14) 「雲国侯年譜」宗衍、宝暦7年5月19日条。
- (15) 以上、西島太郎『京極忠高の出雲国・松江』松江市教育委員会、2010年。
- (16) 「高真院様御年譜」。
- (17) 西島太郎「松江月照寺の高真院廟門と町大工」『季刊文化財』119。2009 年。なお、初代直政から3代綱近までの墓地は、江戸にはなく、松江の月照寺にしかなかった。4代吉透以降は、江戸の天徳寺に本墓があり、松 江の月照寺には支墓が設けられた。
- (18) 「雲国侯年譜」。
- (19) 『松江市誌』 448 頁。
- (20) 『松江市誌』 448 450、520 頁。

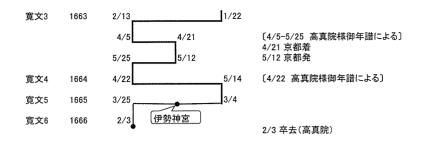
[追記] 貴重な史料の閲覧を許された安部吉弘氏(松江市春日町)には、記して謝意を表します。 (にしじま たろう 松江市歴史資料館整備室)

松江藩主の居所と行動 ——京極・松平期——

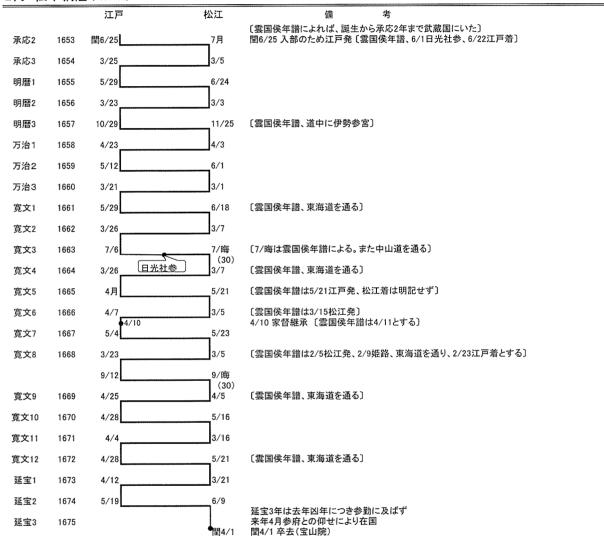
京極忠高 (1593-1637)





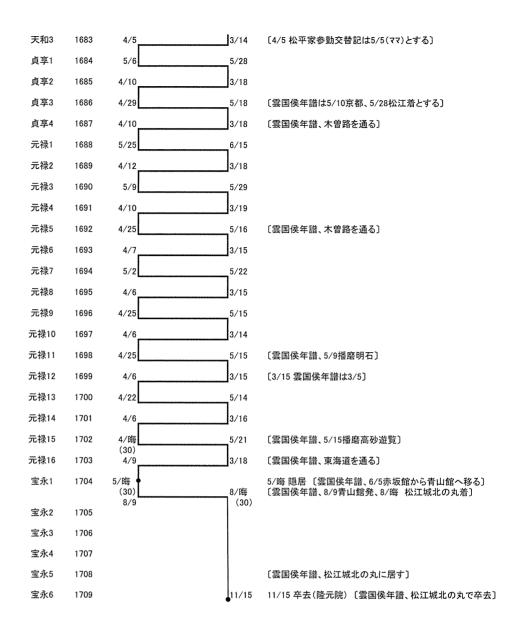


2代 松平綱隆 (1631-75)



3代 松平綱近 (1659-1709)

		4.0	
	江戸	松江	備 考
675	5/晦♥		5/晦 家督を継ぐ〔雲国侯年譜は、これ以前、武蔵国にいたとする〕
676	(30) 4/28	5/22	4/28 入部のため江戸発 [5/22 雲国侯年譜・松平家参勤交替記による]
677	4/4	3/13	
678	4/22	5/19	〔雲国侯年譜は4/25日光社参、木曽路を通り松江へ向かう、とする〕
679	4/5	3/12	[3/12 雲国侯年譜は3/13とする]
680	閏8/26	9/16	閏8/26 公方様他界につき発駕延引 [閏8/26 雲国侯年譜は閏8/25とする]
681	5/18	3/13	[5/18 雲国侯年譜・松平家参勤交替記は4/5とする]
682	4/27	5/18	
	676 677 678 679 680	(30) 4/28 677 4/4 678 4/22 679 4/5 680 閏8/26 681 5/18	675 5/晦 (30) 676 4/28 5/22 677 4/4 3/13 678 4/22 5/19 679 4/5 3/12 680 閏8/26 9/16 681 5/18 3/13

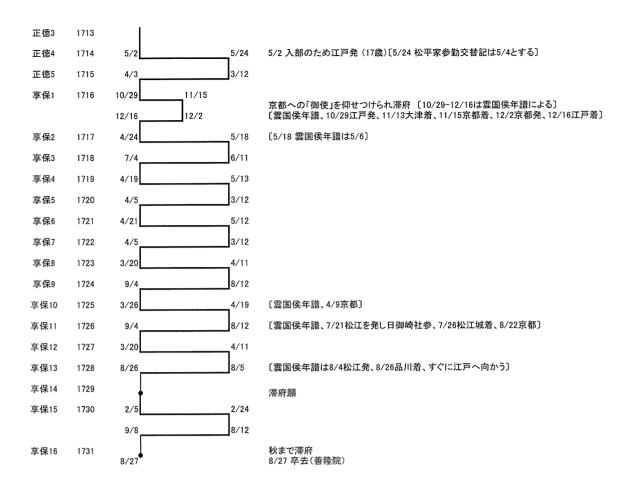


4代 松平吉透 (1668-1705)

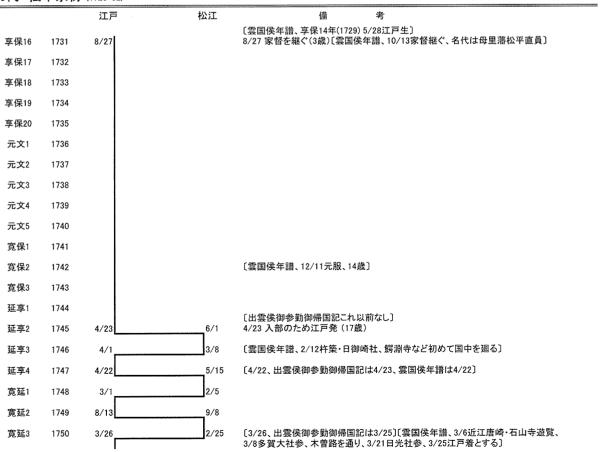
		江戸	松江	備考
宝永1	1704	2/22 5/晦 ◆		【雲国侯年譜、寛文8年7/16 松江生、貞享2年(1685) 9/5 松江発 9/27 江戸着、以後在江戸〕 2/22 養子となる 5/晦(30) 家督を継ぐ
宝永2	1705	9/6		9/6 卒去(源林院)

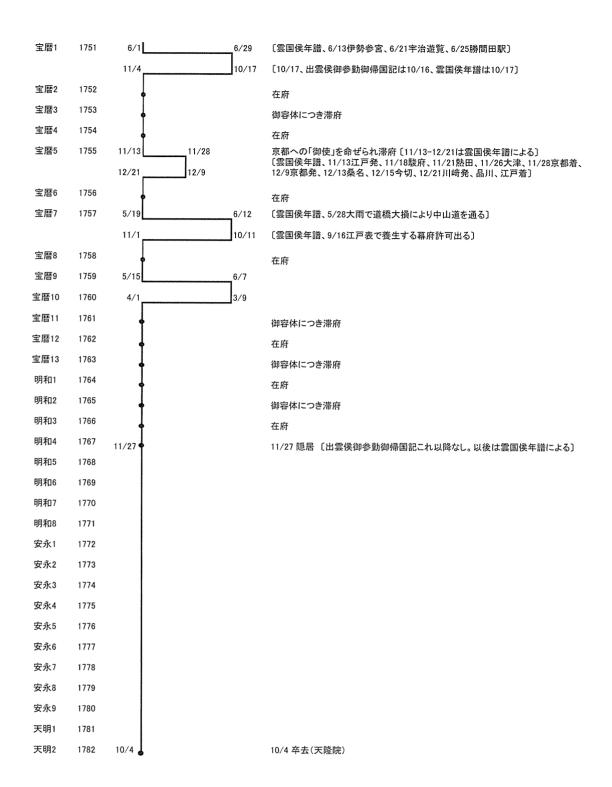
5代 松平宣維 (1698-1731)

		江戸	松江	備	考	
宝永2	1705	10/21		吴年譜、元録11年(169 家督を継ぐ	8) 5/18 江戸生、8	歳で家督を継いだ後も在江戸
宝永3	1706					
宝永4	1707					
宝永5	1708					
宝永6	1709					
宝永7	1710					
正徳1	1711					
正德2	1712	1				

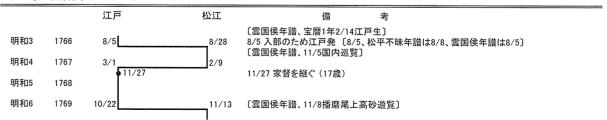


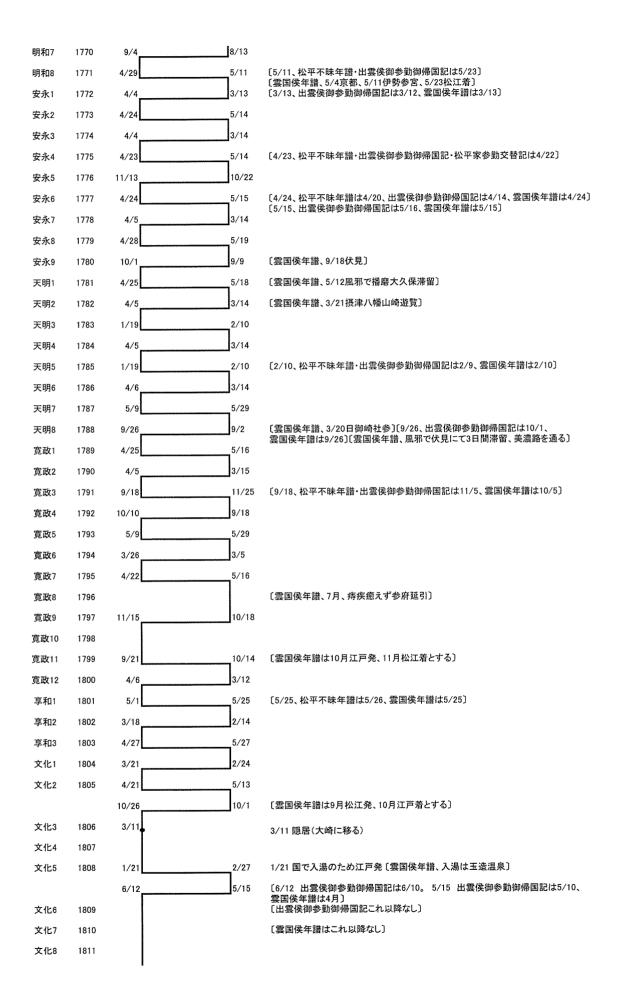
6代 松平宗衍 (1726-82)

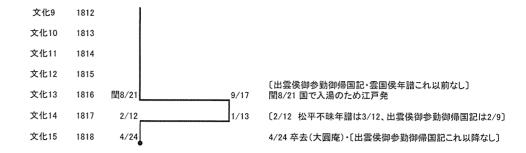




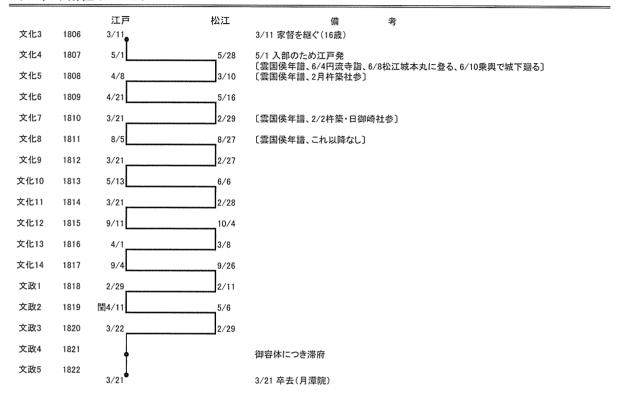
7代 松平治郷 (1751-1818)



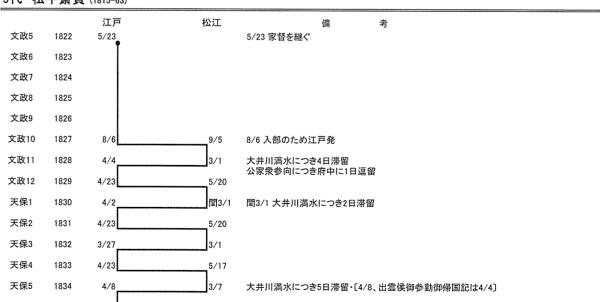


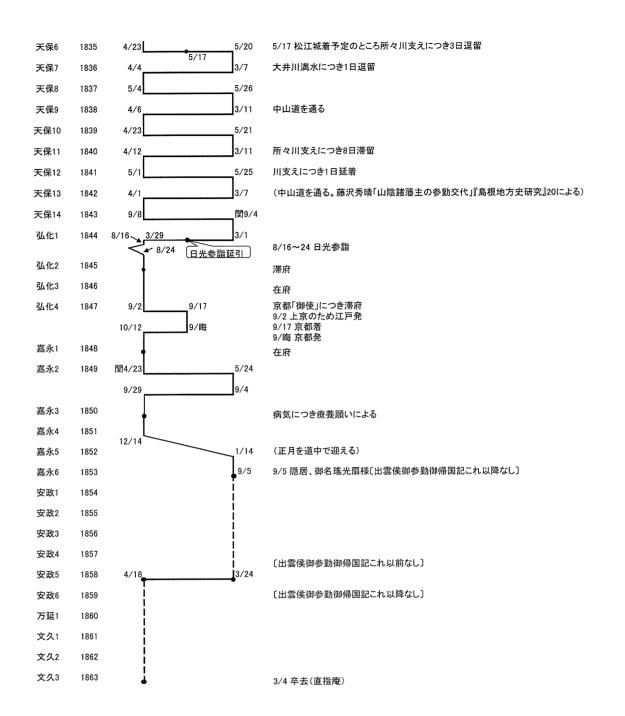


8代 松平斎恒 (1791-1822)



9代 松平斎貴 (1815-63)





10代 松平定安 (1835-82)

